

第 124 回九州医師会医学会



常任理事 大屋 祐輔

第 124 回九州医師会医学会

特別講演 I

演題 「柴三郎、鷗外そして漱石
—伝染病の明治を生きた先達—」

講師 熊本大学 名誉教授 小野 友道 先生

特別講演 II

演題 「織田信長研究の最前線
—「室町幕府の滅亡」と「本能寺の変」—」

講師 熊本大学永青文庫研究センター
教授 稲葉 継陽 先生

九州医師会医学会の特別講演が 11 月 16 日の午後に行われた。熊本県医師会の福田会長の座長で、最初に特別講演 I として、熊本大学名誉教授（元皮膚科教授）より、「柴三郎、鷗外そして漱石 - 伝染病の明治を生きた先達 -」の講義があった。明治時代を生きた柴三郎、鷗外、漱石はいずれも大きな仕事を残したが、その時代の中では、感染症（結核・天然痘・ペストなど）、脚気などが公衆衛生上の問題の一つであった。

北里柴三郎は熊本出身であり、明治 25 年ドイツ留学より帰国し、熊本では盛大な歓迎会が開かれた記録がある。また、その年に、第一回九州医学会総会が行われた。森鷗外は明治 32 年に小倉に軍医部長として赴任しているが、このころ、熊本を舞台とした小説を 2 本ほど書いている。夏目漱石は、熊本の旧制第 5 高等学校の教授として赴任していた。漱石は、ロンドン留学の後、熊本に戻らず、神経衰弱の診断をもらって、東京に戻るようになった。

明治時代には国民病として、結核と脚気が重要であった。明治時代の感染症としては、結核が持続的に、天然痘は 4 回の流行、ペストは明治時代に 1 回の流行があった。

柴三郎は結核にも天然痘にもならず、体力のある人物だった。コッホの元で結核の研究をした柴三郎はツベルクリンの効果を発表している。柴三郎は帰国後、伝染病研究所と土筆ヶ丘療養園を作った。また、このころは、牛乳を飲むことが感染症、とくに結核の治療に有効とされていた。鷗外や正岡子規が結核の治療として牛乳を飲んでいただとの記録が残っている。また、漱石が 5 高教授時代に、結核の学生に牛乳を送っていた逸話が残っている。

漱石も咯血があった折に、結核と北里柴三郎より診断されている。正岡子規と漱石は学生時代から親しく付き合っており、子規から漱石に感染した可能性がある。森鷗外も結核であったが、誰にもこのことを知らせていなかった。なお、森鷗外は、「仮面」という小説で、結核を隠すことについて書いている。

天然痘（痘瘡）は明治時代に 4 回の流行があった。その後、種痘の効果により、大正時代になると、流行は急激に減った。漱石は、明治 3 年に種痘を受け、その後、鼻にあばたができ、このことを、生涯、気にしていたとされる。デスマスクにあばたが残っている。しかし、種痘の効果を理解し、将来には天然痘はなくなると予見していた。熊本の関係では、WHO の天然痘撲滅対策本部長の蟻田功がおり、1980 年の WHO 天然痘根絶宣言に関わっている。

柴三郎はペストが香港で流行したときに調査に出かけ、ペスト菌を発見している。その後、パスツール研究所のエルサンもペスト菌を発見した。柴三郎はグラム陽性としたが、実はグラム陰性であったため、そのため、グラム陰性としたエルサンの成果が有名になった。なお森鷗外が柴三郎の研究がいい加減であったと読売新聞で酷評している記録が残っている。

ペストの流行は明治 29 年に日本で起こったが、初期対応で水際作戦が成功、その後、明治 32 年にもペストが再流行した。このころ、鼠が媒介することがわかり、鼠駆除が行われた。このことがあり、猫が鼠を捕ることから、漱石は、「吾輩は猫である」を書いたとされる。

脚気についても鷗外は細菌説、柴三郎は栄養説であった。これは柴三郎と東大との対立、鷗外の陸軍と高木兼廣の海軍との対立にもつながった。最終的には、柴三郎が正しかったが、鷗外と柴三郎の対立は続いた。

このように、先人たちは対立しつつも真理を追究して、さまざまな疾病を克服してきている。21 世紀となって、今後の世界が、感染症に加えて、戦争や核兵器、AI などの武器への応用などの危険性に直面している。これからの世界でも人類の英知が生かされることが必要であるとのメッセージで講演は閉じられた。

特別講演 II では、坂本熊本県医師会副会長の座長で、熊本大学永青文庫研究センターの稲葉継陽教授による「織田信長研究の最前線 - 室町幕府の滅亡と本能寺の変」の講義が行われた。永青文庫には、細川藩の古文書を保管され、研究に用いられている。この中に信長の 60 通の手紙があり、この講演では、そこからの内容とそれに対する考察が紹介された。

【織田信長と室町幕府】

信長が使った、「天下布武」の中の「天下は」日本全土ではなく、近畿地方のことであった可能性が高いとされた。イエズス会宣教師ルイス・フロイスの報告集からも、天下ということは、

地理的には 5 畿内（山城、ヤマト、摂津、河内、和泉）であり、政治的には政府のことを意味していたようである。織田信長から将軍の足利義昭へ示した 5 か条の意見書からは、将軍と有力大名との関係を大きく変えたものではなく、義昭と信長の役割分担についても、義昭が信長に実権の一部を与えているが、義昭は将軍としての役割を果たすという形であった。日本全土ではなく、五畿内の管理を将軍から依頼されただけだとすると、記録上は信長はその後を考えを大きくは変えていないので、その当時の信長に全国統一をするという野望があったのかは怪しいとの考えが示された。

【織田信長と細川藤孝と将軍義昭】

細川藤孝は、京都の有力幕府側近であり、父方は幕臣の三淵家、母方は公家の清原家であった。藤孝は将軍であった義輝と義昭と諸国大名をつなぐ役割をしており、1565 年に義輝暗殺後に、義昭を信長と結びつけたとされている。1571 年の比叡山焼き討ち以降は、信長と藤孝以外の義昭の家来たちとの不仲が始まる。そのあと、義昭は武田信玄を引き入れることになり、その後、信長と信長に反するグループ（武田信玄、石山本願寺、浅井義景）との対立がひどくなった。

その後も義昭は信長に反旗を掲げて対応したが、藤孝が畿内領主たちを説得することで、体制を挽回した。また、武田信玄が死亡したあとのタイミングで義昭は再び反旗を掲げている。このように藤孝の調略を受けた大名のことが永青文庫で新たに発見されて、信長と将軍と他の領主たちとの関係がわかってきた。1973 年に浅井と朝倉が滅亡した後、義昭を京都に戻そうと信長は交渉していたが、結局、義昭は京都に戻らず、結果として室町幕府の滅亡が決定した。つまり、信長が意図的に室町幕府を滅亡させるという意図がなかった可能性がある。当時は、将軍が京都にいないことが、社会の政治的な不安定につながる懸念が常識であり、信長もそれを基づいて行動していたと考えられる。

次に、義昭は毛利家を頼りとして信長に対抗した。松長久秀・久通の反乱はその第一歩であった。その後も、信長は不安定な状況のなかで、武力で大阪本願寺をはじめ周りを制圧していくが、根本的な体制の構築はなされていなかった。その状況の中で光秀による本能寺の変が起きた。本能寺の変のあと光秀は義秀を京都に戻したいと考えていて、その書状を紀伊国の土橋重治に出している。すなわち、京都に将軍がいることが大事であるということは、信長のみならずこの当時の大名たちの幅広いコンセンサスであったとの考えを補強する。

【近世的見地と軍役規定】

その当時の、百姓は、同じ夫役であっても、陣夫役を忌避していて、給付と負担の明確な説明がない場合には百姓を戦場に動員することは不可能であったとする記録が光秀の書類にある。また、戦線の拡大により、明智領地の百姓の農地での経営が悪くなり、荒れ地の出現や勧農が進まずに、給人経済が衰退していることがわかっている。その後、光秀は検地を断行した。このように近世の大名たちは、百姓が必ずしも従わないため、検地と石高から、百姓が年貢や夫役を決めていく制度を作っていた。一方、信長はそのような根拠に基づかず、軍事動員を要求していたため近世の大名たちとの関係が悪化していった。信長から信頼されていた光秀は、畿内管領として、畿内の国の管理を任されるようになっていた。しかし、当時の信長は、光秀の能力を買っていたものの、実際の運営では尾張衆を徴用していた。四国攻めのときも、仲介役をしていた光秀を外して、尾張衆に攻めさせるようにしていたため、戦闘状況は泥沼化していた。また、中国攻めの際も尾張藩中心で攻撃をしており、光秀と畿内衆は遊撃隊の立場でしかなかった。

本能寺の変のあと、明智光秀は、細川父子へ自筆の誓約書を送っている。古い体制を改め、たとえば、大名領検地による支配従属関係の構築と領地高の確定と連動して、領国境目を確定して、領土紛争を抑止する方向性を考えていた。細川藤孝は、光秀の姻戚であり、当初は光秀と行動を共にしていたが、本能寺の変の後は、秀吉と通じて、状況に大きな影響を与えた。藤孝は、室町幕臣のエリートではあったが、世の動きを予見して行動していたと考えられる。

秀吉は、領地確定を各地方で行った。領土裁定権を持ち、形式上の根拠として、紛争を解決して、さらに関白となり国全体を安定化していった。

このように、信長の改革者であるとのイメージは、最近の資料の再検討によって崩れつつある。信長は室町幕府の将軍の権威を利用して領土を広げようとしていたが、室町幕府の滅亡は将軍が京都に戻らないことで偶然に生じたことであり信長が目指していたわけではないとのこと、領内の統治の仕組み作りには取り組んでおらず、徐々に周りの信頼を失っていったことなど、これまでの信長に対して国民が持っている概念を変えるような研究結果が出てきている。現代まで残る歴史上の逸話の形成については、それ史実の積み重ねによるものとは限らず、その後の支配者の意図や国民の期待感などさまざまな他の要因も含まれる。学問としての歴史の研究は、どのようなバイアスがあるのか、何が歴史上でより真実に近いのかなど、さまざまな文献や資料等を用いて明らかにすることであるとのメッセージがあった。

※報告書の詳細につきましてはホームページをご参照下さい。
<https://www.okinawa.med.or.jp/medical/kaihou/houkoku/202303-2/>

